

# 気持ちの大切さ

佐野尚美



愛育養護学校は幼稚部と小学部からなります。一日のプログラムは子どもによって決まります。保育者が企画したり、目標をもって設定したりすることもあります。それさえも子どもが選ぶか選ばないかをとっても大切にしています。「きょうは一日何が起こるだろうか？」と保育者がワクワクするようになり、登校してきた子どもがまず始めたこと、それがスタートです。給食はなく、お弁当を持ってきます。そのお弁当を食べる時間、場所もまちまちです。登校下校前に食べる子どもなど、お弁当を食べ

ることを誘ったり、どこで食べるかを設定したりもしますが、子どもが気持ちよく「食べる」ということに向かえるように配慮しています。

愛育養護学校では、何かトレーニングをする、というプログラムは特別に設けていません。子どもとかがわりながら、その子どもの成長に合わせて適当だと思われるときに保護者とも話し合いながら、自然に保育の中に織り交せて伝えていくという形をとっています。

ここでは「排泄」について、少し事例を挙げてみ

たいと思います。就学前にトイレで排泄ができるようになってくる子ども、おむつをしている子ども、トイレ以外でする子どもとさまざまです。おしっこはトイレでも、うんちはトイレでしないこともあります。一般的には早くトイレで、できるようになってほしいと力を入れたくなる事柄です。しかし、食事に関してもそうですが、偏食なく食べるようになってほしいと思いつつもなかなか大人の思うようにはならないものです。意欲的に取り入れる気持ちよく出すということはとても繊細で精神的なものに大きくかかわっているものだと思います。

N君は水遊びが大好きで、毎日ホースを手にして水の流れや変化を楽しみます。時どきホースの先から水を飲むこともあります。その遊びを中断することなく、おしっこはその場所ですませ、水で流していました。学年が上がるごとに校外活動も増え、ト

イレに行かざるを得なくなる状況に合わせて、学校のトイレでも校外のトイレでもおしっこをすることができるようになってきました。しかし、うんちに關してなかなかそうはいきません。安心できる家のトイレでも難しいのです。もよおしても、なんとか「出さない」ように耐えるのです。ぎりぎりになり、いつもの水遊びをする場に出したこともありましたが、常に耐え忍ぶことを選びます。きょうはうんちが出そうで心配だというときは、外出の誘いにはのりません。自分の体の変化についてよく理解しているのだと思います。

いよいよ苦しくなってきたのではないかと、思われるとき、家で浣腸をしてすっきり出せるようにしています。最初はそれすら嫌がってやらせないこともあったようですが、徐々に、出したほうがすっきりするし、体が楽だと思えるようになったのか、

やらせてくれるようになっていきました。卒業間際には家のトイレで時どき座ってできるようになってきたようです。

T君は幼稚園に入園してきたときからトイレで排泄することはできていました。また、誘わなくても自分の判断でトイレに行っていました。しかし、わざとホールでしてみたり、庭に向かってしたりすることがあります。また、一人庭で遊んでいるとき、遊びの自然の流れのようにその場ですることもあります。トイレに行くことができる子どもが、わかっているけれど大人をからかうため、大人の気持ちを引きたいためなど、あえていけないと思われるところでして見せることは時どきあります。その子どもを見てまねをする子どももいます。そのようなとき、叱るのではなく、大人のほうがまずはずせそのような行為になったのかを考え、その子どもにとつ

て負担にならない言葉を使って、トイレに行ってほしいことを伝えるように心がけています。

便秘気味のM君は、いつの間にかトイレでうんちをするようになりました。M君は備え付けのトイレットペーパーをあるだけ全部カラカラと出して便器に突っ込み、流そうとします。少量であれば水の勢いで流れますが、ひと巻き近くあるようなときは、水が便器からあふれ出ます。水を流してその様子を確認してニコニコしながら走ってその場を去ります。大人が見つけたときは、慌てて取り出しますが、その様子も少し興奮気味に笑いながら見えます。

大人が気づかず水があふれたときは早く気づいてほしいらしく、本当にうれしそうに逃げていきます。その様子を「何かあったな？」と感じてトイレに駆けつけるとあふれています。M君にとっては大

成功！　このようなときもミーティングなどで「なぜトイレをあふれさせるのか？　詰め込みたくなるのか？」などとその行為を話し合います。M君の排泄に関係がないかもしれませんが、便器の水の流れはあつたものが水に流され見えなくなったり、流れが止まりあふれてきたり、いろいろな想像ができるものです。トイレが詰まると本当に困ってしまうのでやめてほしいと伝えますが、この行為を元に、大人と触れ合ったり言葉を交わしたり、かわりができるチャンスでもあります。

前出のN君は五、六年生のころ、排泄をするのでもないけれど、幼稚部の部屋にあるトイレに入ったり出たりしてトイレの中で過ごすことがよくありました。電気をつけたり消したり寝転がったり。時には、トイレの中でうんちを出さないように耐えていることも。ほかの人がそのトイレを使っていると、

ガチャガチャと握り手を回して確認することもあります。N君にとつてそのトイレがとても意味ある場所と理解している私たちは、N君がいると、「N君使わせてもらいます」と声をかけて入るようになっていきました。そうすると握り手を回すことができます。

S君は入学した時はおむつを使っていました。「トイレ大丈夫？」とおむつをしていても声をかけると、「行く」「行かない」と応えてくれます。つい遊びに夢中になり大人も声をかけることを忘れていると、おむつにたっぷりとおしっこをしていきます。たっぷり出ているからといって替えてほしいということは言いません。

入学時、保護者からおむつを夏にはとりたいという意向を聞いていました。しかし、S君は、トイレに行つて排泄することは十分に理解していても、も

よおしたときに行きたいと伝えてきていませんでした。そこで私たちは、S君が遊びに夢中になっているから中断することが嫌なのか、まだ歩行ができて、はって移動しているという身体的なことからなのか、丁寧にみていかなければならないと考えていました。

夏休みの一週間くらい前になって、家でもおむつをはずす時間を長くしている旨が伝えられ、日中もはずして過ごしてみたいと、チャレンジすることになりました。おむつをしているときよりは大人も注ぎ深く気にかけます。遊ぶ気持ちこそがないよう、何よりもS君の気持ちに傷つかないようにタイミンクをみて声をかけていきました。すると九時過ぎに家ですませてから、お昼ご飯前の十一時半近くまでトイレに行かなくても大丈夫なのです。ご飯前もしっかりと排泄し、その後もつい出てしまいました

た、ということが一度もなく夏休みを迎えました。

S君にとって、とても緊張の高いことだったと思いますが、慎重に状況判断しながらチャレンジしていくことも、子どもによっては大切なことであり達成感にもつながることであると実感した出来事でした。S君にとってトイレは排泄だけの場ではありません。お弁当の時に、排泄をすませて席についたはずなのに、「先にトイレ行く」と言って再度トイレに行きます。一緒に行くと本当に出るときもありますが、出ないときも多くあります。大人と会話を楽しみ、何度も「みんなお弁当食べちゃった？」と聞いていました。入学当初は「トイレに行きたい」と伝えてくれたことを大事にしてそのまま対応していたのですが、毎日繰り返しているうちに、違うところにも理由があるのではないかと思えてきました。

入学したばかりで友達の様子はまだわからず緊張して過ごしていることで、後ろを気にしている

様子から背中が守られていないと不安になるのではないか。また、教室が賑やか過ぎても落ち着いて食べることができないのではないか。教室の隣のホールが賑やかでも入り口や窓を閉めてほしいと言います。お弁当をあまり食べない少食だと思っていたことも、ここに理由があったようです。安心する状況を整えようとトイレに行かなくても大人と二人、いろいろな話をしながら、友達がいて少しくらい賑やかでも食べることが出来ます。S君にとってトイレは自分の気持ちや身を守る場でもあるのです。

いくつかの事例を挙げましたが、ほかにもいろいろな形で「排泄」に関しては表現されます。私たちは「排泄」のみに焦点を定めず、子どもの心の様子や身体的な事情、そして物理的環境などさまざまな角度からとらえ、長いスパンで取り組んでいきます。保護者とも十分に話し合わなければなりません。直接的に排泄のトレーニングをするのではな

く、保育の中で自然に伝えながら排泄が子どもの負担になったり、こだわりになったりしないよう考えていきたいと思えます。みんなが遊ぶホールや庭などで排泄していると衛生面にも気をつけなければなりません。一見すると子どもに伝えていないのではないかと思われることもあります。しかしなぜそのような行為になっているのか、一つひとつに意味があるものととらえ、子どもを理解しながら伝えていきたいと考えています。

排泄は食べること以上にプライベートルなことです。それだけに丁寧に考えていかなければなりません。楽しく食べて気持ちよく排泄する。このことは子どもの気持ちと深く関係しています。子どもの生活が充実し、安心して過ごせる環境や人間関係が広がっていく中でゆつくりと、その子どものペースで進めていくことだと思います。

(愛育養護学校)